

私が出会った本

中嶋 嶺雄



私のように中国やアジアのことを研究している者にとつて、もっとも大切な思想的・文明的土壌は、なんといってもヨーロッパではないか、と私自身はこのごろつくづく思っている。

こうした思いに駆られて、このごろはゼミナールの学生たちを引き連れて「ヨーロッパからアジアを考える」といったテーマのヨーロッパ研修旅行にも出かけて行く私ではあるが、そのようなどき、テキストに選ぶのは、高坂正堯著『文明が衰亡するとき』（新潮選書、一九八一年）と木村尚三郎著『ヨーロッパとの対話』（日経選書、一九七四年）である。

もあるのだが、『文明が衰亡するとき』はこの著が広く読まれたベストセラーであることによっても示されているように、実に内容の豊かな文明史論である。

文明論というと、とかく呪術的大時代がかったものが多いなかで、この著はローマ帝国の衰亡のプロセスやヴェネツィア王国の栄光と挫折の歴史を国家論と外交史の立場から多彩色でとらえていて、しかも同時代的問いかけに充ちている。「通商国家は他人に依存している存在であるだけに、脆弱性を持っている」（同書一四四ページ）とか「基本的に、ヴェネツィア人たちは疲れてしまったと言えるであろう」（一五五ページ）といった指摘は、今日の通商大国・日本への教訓であることはいうまでもない。

ヨーロッパからアジアを考える

著者は、「子供のころから、このよ
うな本を書いてみたいと思つて来た気がする」とみずから語っているけれど、本書は著者の若き日の思索紀行『世界地図の中で考える』（新潮選書、一九六八年）がさらに成熟した地点で花咲いたものであり、この間に『古典外交の成熟と崩壊』（中央公論社、一九七八年）という、著者の学位論文にもなった外交史研究があつてこそ、本書は成つたといえよう。その高坂氏は最近、過般のフォークランド戦争についての論考「フォークランド戦争の原因とその教訓」（『国際法外交雑誌』第八三巻第五号、一九八五年）で、この戦争は「十八世紀に戻つたような戦争であつた」という大変興味深い結論を出している。とにかく高坂氏の国際政治論には、その育ちの良さを映し出す伸びやかさとロマンがあるのであつて、やはり氏の存在はかけがえないものである。

木村氏の著作も私はつねに愛読しているが、『ヨーロッパとの対話』から『西欧文明の原像』（講談社、一九七四年）や『カオールの酒壺』（講談社、一九八三年）などを経て、まさに芳醇

なワインの味わいをもつ最近作として刊行されたのが『家族の時代——ヨーロッパと日本——』（新潮選書、一九八五年）だといえよう。今日の低成長時代は、世阿彌のいう「男時、女時」の「女時」時代であつて、天下國家を論じる大思想、大論議の時代から、もっと感性的な「つなぎ」の感覚が大切にされる時代となり、個人主義ではなく「個人」の時代になってきているがゆえに、家族が再発見されつつあることをヨーロッパと日本の共通性として著者は論じている。

この書は、ヨーロッパの大思想家や近代市民革命の世界史的足跡などを通じてヨーロッパをとらえることに馴らされてきた読者を、妻と夫そして子供が「パンを分け合う」姿を通じてとらえられた日常生活のヨーロッパ世界に誘い、そのことによつてヨーロッパ近代の豊かさの真の意味を伝えてくれているといえよう。「イギリス・アメリカ型の女性の生き方・考え方は、家庭料理の不味さと関係があるように思われる」（本書二一六ページ）という著者の女性論もまた、最近流行のウーマン・リブ型「女の時代」の主張とは異なった女性論として思わず膝をたたく。